「君津の里山のにぎわい」里山活動

楽しく・深め・つなげよう

ＮＰＯ法人ちば里山センター
理事長　金親　博榮

本日は、「君津の里山のにぎわい」に、ようこそお越し頂き、ありがとうございます。
この企画は、千葉県の「ちば里山LIFE体験交流事業」のプログラムときみつ里山活動ネットワークの共同事業として、君津市「文化のまちづくり」１％支援事業」のご支援を頂き開催されるものです。この体験交流事業は、千葉県に首都圏等から、観光や居住する人を呼び込むため、里山の素晴らしい体験を通して、理解を促進していこうというものです。
また本日の企画運営については「君津里山活動ネットワーク」並びに「君津市造園建設業協働組合」様の、ご尽力の賜物と感謝しております。
実は本日、私も、非常に嬉しく感じておりますのは、この開催に至る前段階から、いささか関与していたものの一人として考えているからです。顧みますと平成15年本県での全国植樹祭の開催時に、全国の先駆けとなった「千葉県里山条例」が施行されました。この趣旨を受け市民が主体となり、行政が支援する形で「里山シンポジウム」を初めて開催したのが２００４年の上総アカデミアでした。以来１３年間、県内各市との協力によって実現してきた「里山シンポジウム」の成果の一端を見る思いがあるからです。

今日「里山」とは、山林に加え、田畑、水辺をも含むエリアを対象として、農林業の生産の場であると同時に、多様な生き物の生育空間や景観形成、防災や気象緩和等にも大きな役割を果たす場として認識されるものとなっています。国際的にも。「ＳＡＴＯＹＡＭＡ」として、普遍的な用語となってきました。このシンポジウムは、毎年開催して、今年１３回目を南房総で開催するに至っています。

里山の保全・整備は、昔から土地所有者に委ねられてきましたが、今や、適切な役割分担の下に、県民全てがこれに関わり、余暇や教育に活用できる場として利用し、人と里山との新たな関係を築く時代となりました。

一般市民の里山活動は、多分野にわたる、自発的ないわゆる「ボランティア活動」の一分野として、大きく発展する事となり、住民参画の地域づくりの典型ともなって来ています。
２０１１年の第８回いすみシンポジウム以来、市原、君津、山武、そして南房総各市で、開催した事を契機に、地元の団体、行政による地域おこしの視点から活動団体の組織化が次々と図られ、レールが敷かれつつあります。そのトップランナーが、千葉県内１位の森林面積と森林率２位の君津市であります。

里山の活性化は、多くの自治体で、地域全体の活性化の基盤で在るとの認識ができてきましたが、工業、農業、林業と観光の都市、君津市が、豊かで楽しい市民生活の場として、一層の発展を目指し、里山を生かしながら、益々充実、発展される事を期待して、開会の際しての、挨拶と致します。